

資産作りの 新常識

まさおか としゆき
正岡 利之 (MUF G資産形成研究所長)

リバランスは年単位程度で



1982年、三菱信託銀行(現三菱UFJ信託銀行)入社。主に年金や投資信託を中心として、資産運用業務に携わる。2015年より同社で金融教育業務に従事。18年8月より現職。



長 期的な分散投資を前提とする必要はない。一方で、例えば月に1回といった具合に定期的に資産の状況を把握しておくことが望ましい。その際に、そのときの価格である「時価」で把握することがポイントだ。

預金などを含めた資産全体の中で、投資商品が時価でいくらになっているのか、つまりどの程度のリスクを取っているのかを把握し、さらに「時価での資産配分」がどうなっているかを知っておくことも大切だ。ただし購入した価格と時価を比較して、「評価損益(時価-購入価格)」に一喜一憂する必要はない。

資産形成脳を鍛える

市場の価格は動いているので、時価で資産配分を把握すると、当初に意図していた配分比率とは異なった状態に変化していく。多くの場合、そのまま放置していいが、当初の意図と大きく離れた場合やその時点で投資方針を変更したり、新たに投資金額の増減を行う場合には、資産配分の見直しを行うことになる。これを「リバランス」という。

図1 リバランスの意味
(価格が上昇してきた資産を売却して、価格が下落している資産に移すイメージがリバランス)

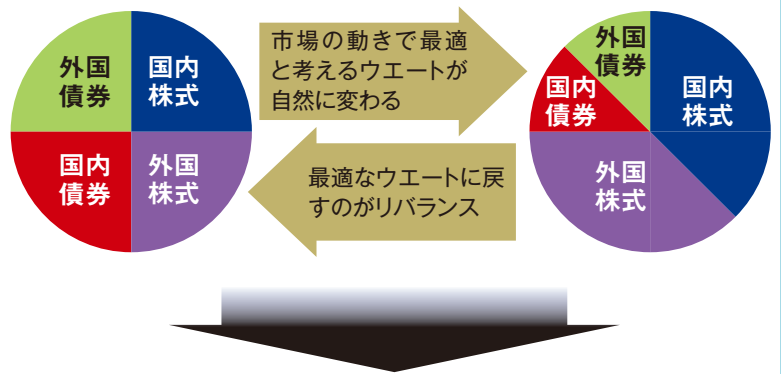
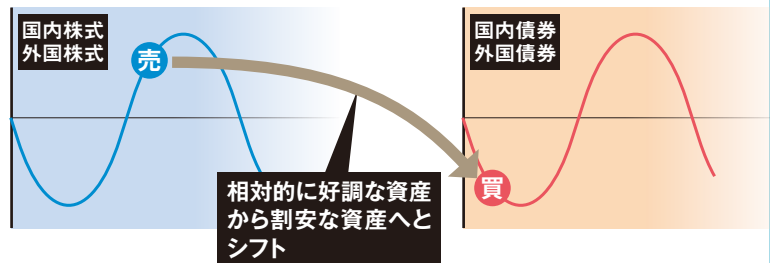


図2 相対的に高くなった資産を売り、割安な資産を買う



(出所)三菱UFJ信託銀行

例えば、投資を始めてから(図1左)、国内外の株式のパフォーマンスが他の資産よりも相対的によくなったとすると、株式の構成比率が高くなってくる(図1右)。元の構成比を維持する場合、株式から他の資産へと移し替えていくことがリバランスだ。相対的に価格が高くなった資産を売却し、割安になった他の資産へと入れ替える意味合いがある(図2)。

リバランスの方法については、一度に資産配分の構成を変えるような売買を行う方法がある。また、

各資産への積立投資金額の配分を変更することでも対応できる。新たに投資金額を増やすときなどに、資産配分を変更することも可能だ。

定期的なモニタリングによって、投資の時価金額やポートフォリオの状況を確認することで、資産形成のことを考える時間を作り、ときどき「資産形成脳」をトレーニングするのも効果的だ。ただ、リバランスを実際に行うのは頻繁である必要はなく年単位程度のスパンで考えればいい。

